

ねりまのむかしばなしから

伝説の地をたずねてみましょう！



さんぼうじ いけ きん くら 三宝寺池の金の鞍

(石神井台1丁目／石神井公園)

都立石神井公園三宝寺池南の崖の上には、鎌倉末期から豊島氏の城館があった。しかし文明9年(1477)旧暦4月、太田道灌軍に攻められて落城し、400年余り続いた名家は滅亡した。この石神井城落城にまつわる伝説がいくつか残されている。その一つに「金の鞍」伝説がある。

豊島氏最後の城主泰経は、道灌軍に石神井城を包囲され、城の命運もこれまでとみた。そこで、白馬に家宝であるさん然と輝く金の鞍をつけ、ゆうゆうと城を出ていった。そして背後の丘に登るや馬に鞭をあて、そのまま三宝寺池に沈み、たちまち姿が見えなくなってしまった。

また、明治の中頃に書かれた遅塚麗水の小説『照日塚』では、照日姫が落城の際、三宝寺池に飛び込んでいる。この物語発表の後、「照姫が金の鞍を背負って池に身投げした」とも地元では伝えられるようになった。

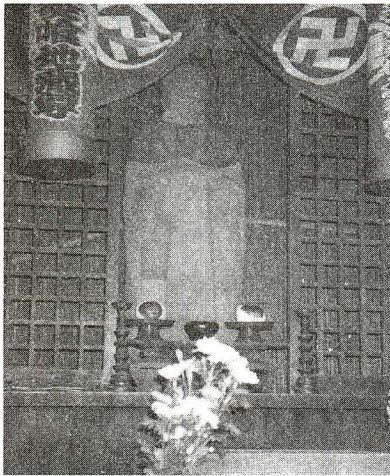
明治末、大正の初め、昭和の初めと、地元では「金の鞍」探しを行ったが、何も発見されなかった。

保護者の方へ

ふるさとねりまで語り継がれてきた伝説の一部を紹介しました。お子様に語り聞かせたり、お話に出てくる場所をご家族で散歩されてみてはいかがでしょうか。また、区民情報ひろば〔区役所西庁舎1階〕・郷土資料室〔石神井図書館地階〕・区立図書館〔各図書館に所蔵の有無を確認してください〕などで、『練馬の伝説』（昭和52年、教育委員会発行）がご覧になれます。

く じ ぞう そば喰い地蔵

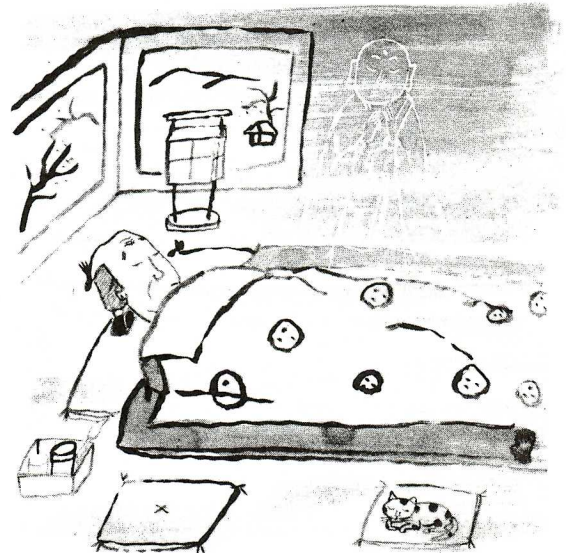
(練馬 4-25 / 十一ヶ寺 九品院)



江戸浅草田島町(現台東区)に誓願寺せいがんじがあった頃、浅草広小路に尾張屋というそば屋があった。ある夜、一人の僧いっばいが来たので、仏心の深い主人は一杯のそばを差し出した。僧はそれを喜んで食べ厚く礼を言って帰ったが、次の夜もまたその次の夜もやって来てそばを食べていった。それがひと月ほど続き、店の者も不思議に思うようになった。主人がある晩帰っていく僧の後をつけて行くと、誓願寺の塔頭ちゅうである西慶院せいけいいんに入って行き地蔵堂の前で消えた。その夜主人の夢に気高い僧が現れ、「われは西慶院地蔵である。

日頃汝なんじから受けたそばの供養に報いて、一家の諸難を退散し、とくに悪疫を免れしめよう。」と告げた。以来、主人は西慶院の地蔵にそばを供え、祈願を怠らなかつた。ある年、江戸に悪病が流行したが、そば屋の一家はみな無事だった。その由来を聞いて日毎に地蔵を参拝する人が増え、願いがかなうようにそばを供えたので、「そば喰い地蔵」と呼ばれるようになった。

明治になって西慶院は九品院に合併され、関東大震災後現在地に移転したので、そば喰い地蔵も九品院に安置されている。



み えんま 身がわり閻魔

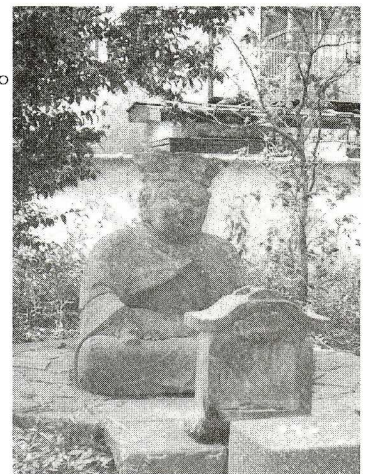
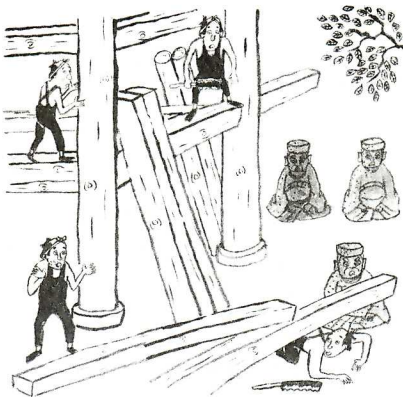
(高野台 3-10 / 長命寺 奥之院)

長命寺の奥之院の裏に、石仏が並ぶ。背後の小高い所に胸から腹に傷のある像があり、「身がわり閻魔」と呼ばれている。

いつの時代であったか寺を再建した時、大きな材木が倒れ

一人の大工がその下敷きとなった。しかし、仲間がかけつけて見ると不思議に怪我もなく助かっていた。その代わりに傍にあった閻魔像が材木を受け止めていて傷ついていた。

また、住職の身がわりになって盗賊に刀で斬られていたという話も伝わっている。



じ ぞう やいむさまの地蔵さん (錦1-19/円明院)



開進第一中学校の西南付近に昔、長源寺という寺があった。そしてこの寺の入口と思われる角地に地蔵が立っていた。「やいむさまの地蔵さん」という。

下練馬村の島野弥右衛門は「やいむさま」と呼ばれ、親しまれていた。ある寒い夜、みすぼらしい身なりの旅の僧が托鉢たくはつにやってきた。村は貧しく食べ物を施す余裕はほとんどなかったが、弥右衛門は僧をねぎらいもてなした。僧は喜び「ここから見えるところ一帯

をあなたの土地にしてあげよう。」と南の方を指して言った。そして姿を消してしまったので皆不思議に思い、弘法大師けしんの化身であろうと言いあった。その後、弥右衛門の家は繁栄し、そのとおりとなった。そこで、南に向けて地蔵を建てた。天明5年(1785)2月のことであった。

この地蔵は、錦1丁目の円明院門前東脇に移されている。



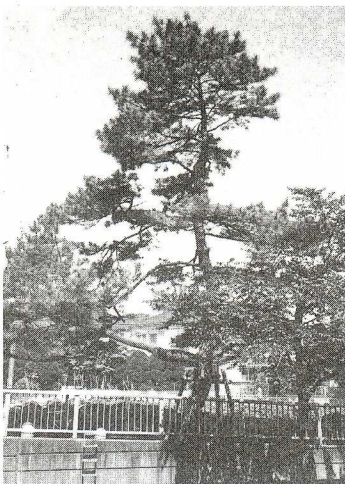
せき 堰ばあさん (早宮3-26/中大グランド跡地運動場付近)

石神井川のほとりに糶屋こうじやという荒れ野があった。そこに田畑へ水を引くための堰があり、老婆が住んでいた。ある時、老婆の姿がいつの間にか見えなくなりました。村人たちが不思議に思っ行ってみると、大きな蛇ほこらがいた。そこで、これはばあさんの化身だということになり村人たちは堰の傍に祠せきもりを建て、堰守の神として供養した。この祠を「堰ばあさん」と呼ぶようになった。この祠に参詣すると咳せきにご利益りやくがあっ

て、百日咳などはぴたりと治るといわれ、近郷近在から参詣に人が集まるようになった。

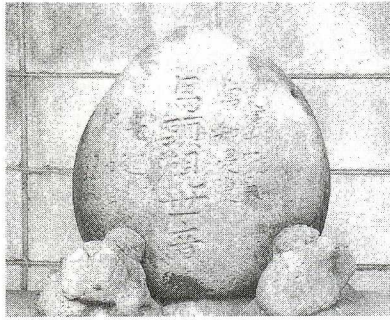
帰りには石神井川の水を汲んで持ち帰り、子どもに飲ませた。ご利益のほりのあった人は、お礼として幟のぼりを奉納したという。

今は祠はなくなりましたが、大きな松の木が立っている所がその跡と言われている。



ちからも そうべ え ば とうかんのん
力持ち惣兵衛の馬頭観音

(大泉学園町2-27-14地先)



こぐれむら
小樽村の百姓惣兵

衛は、江戸牛込のあ
る武家屋敷へ下肥を
汲みに行っていた。
その屋敷の主人は惣
兵衛が力持ちである
ことを聞いていたの



で、彼を庭に入れ、傍にあった石の一つを指して「それを持ち上げてみよ。もし持ち上げることができたら、その石をやろう。」と言った。惣兵衛は見事に石を持ち上げ、褒美の金までもらった。惣兵衛は喜んで、石を老馬の背につけ

て村に帰ったが、家の近くまで来て馬はとうとう力尽きて倒れ、死んでしまった。わが子のようにかわいがっていた馬に死なれ、惣兵衛は泣きながら馬の遺体を葬り、馬に背負わせてきた石を建て冥福を祈った。それがこの馬頭観音だという。

「てんばの吉」像 (関町北4-16/本立寺)

本立寺の山門を入ると参道左側に、数基の石仏が並んでいる。一番手前の石仏は総高90cm程の行者像で「てんばの吉」と呼ばれている。

明治の初め頃、関村の付近に吉五郎という人がいた。ところが、住んでいる家は、青梅街道筋の出店(上石神井村)あたりという人もあれば、竹下だったという人もあり、はっきりしたことはわからなかった。また何をしている人かも、誰一人知っている者はいない。物乞いだったという人もいるし、また易を見る人だったという古老もいる。姿を見ると60才位に見え、鬚を結って福々しい顔をして、いつもニコニコしていた。また、毎日のように寺に顔を見せていた。吉五郎は子どもが大好きで、幼い子を特に可愛がり、どの子どももわけ隔てなく愛した。体の弱い子どもが吉五郎に抱かれるといつの間にか丈夫に育つという。そのことが世間に広まり、弱い子どもを持つ親や、赤ん坊を持つ親などは、わが子を抱いてもらいたいと思っていた。そして、吉五郎に抱かれた子どもは、みんな丈夫に育っていった。吉五郎は村人から鬼子母神のように尊ばれながら、明治21年(1888)に亡くなった。その後、檀徒が願主となり石像を建て供養した。

